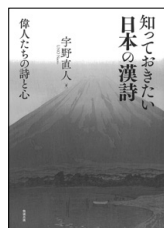


明治一五〇年を機に、 漢詩から次の時代を開く

ガイ ホツブス



宇野直人著
知っておきたい日本の漢詩
偉人たちの詩と心

A5判 416頁
勉誠出版
[本体3,800円 + 税]

西洋に於ける漢学の歴史はおよそ四五〇年である。イエズス会の宣教師であるマテオ・リッチ（一五五二—一六一〇）が布教活動の為、イタリアから明代中国に渡った時に始まる。西洋学術を中国に紹介して、キリスト教伝道の基礎を成しながら、中国の事情を積極的に西洋に伝えた。西洋での漢学の最初の成果の一つはリッチが作った中国初の世界地図『坤輿万国全図』であった。そのあと、フランスやドイツ、英国等が宣教師や大学の専門学部を通して中国学に励んだ。

一方、本書には、「日本人は既に飛鳥時代、つまり七世紀後半ごろから、漢詩を「読む」だけではなく、「自分で作る」という段階に入っておりまし」と指摘されている（二頁）。つまり、一三〇〇年前から、日本人は自らの心情を漢詩で表現していた。しかし、漢字そのものの日本への伝来の時期（三

―四世紀）と、その伝承と共に渡来してきた中国の思想や古代文学を考え合わせると、日本の漢学の歴史は約一七〇〇年に上り、中華文化圏の中ではおそらく最古・最深の交流実績を有する。この類のない文化関係を背景に、本書のテーマである日本古来の偉人たちの漢詩とその心を紹介する意義は大きい。なぜなら日本人は、中国での詩の発展の時代を同時に生き、影響されながらも、日本の独特の事情を反映して日本漢詩を作成してきたのであるから。

また、本書に述べられている様に、日本人の漢詩鑑賞の「特権」は書き下し文にある（三七八頁）。西洋人と同様、日本人は最初に漢詩の原文を見て各漢字を視覚的に読んで意味を理解する。そして更なる「楽しさ、充実感」の為に、日本語独特のリズム感を与えてくれる書き下し文が大いに力を發揮

してきた。日本語の語順で仮名を交える書き下し文では、漢詩の視覚的效果だけではなく、さらに日本語のリズムが鳴り響く音楽性も生まれてくる。漢文を訓読する為に発明された実用的な言語手段は、予想外の文学的な快感を日本人に差し出した。

各章に、原詩と書き下し文の「共演」が見事に展開される。こうした音楽性への一層の理解の為に、オーディオブック版も用意されている。本書はオーディオブック（ファンタスティック！ 漢詩ワールド）のシリーズの一環として、『漢詩の歴史 古代歌謡から清末革命詩まで』（東方書店、二〇〇五）とともに、著者の補足説明つき朗読によって配信されている。

主な配信サイト・アプリケーションは、

- ・ べんじ (パントリーング株式会社運営) <http://www.digi.jp/>
- ・ audible <https://www.audible.co.jp/>
- ・ 「Google Play」ストア <https://play.google.com/store?hl=ja>

本書の著者は、共立女子大学国際学部教授をはじめ、様々な場で中国文学の研究や教育、啓蒙活動などに携わっており、本書においても、研究生や学生、一般社会人など、幅広い読書層に興味を持たせることであろう。特に、漢詩を学ぶ学生にとって、本書の付随資料は大いに役立つ。「附録」で

は、古体詩と近体詩の特色や押韻の仕方、詩句の切り方、内容の構成法、対句、平仄などの説明が学習者の理解を助け、「主要参考書目」では、総記から章別に用いられる著作物など、追跡研究を支援するであろう。本書はまた、漢詩の全景や大観を紹介している本著者による他著書（『漢詩名作集成―中華篇』（明德出版社、二〇一五）や前掲『漢詩の歴史』など）と共に、文学と歴史の密接な関係を物語る。

本書は一三章から構成されており、時系列的に、また列伝的に、日本漢詩の名人達を紹介する。

各章の登場人物は以下の通りとなっている。

第一章は、学者であり官僚、文人でもあった平安時代の菅原道真（八四五―九〇三）。

第二章は、富士山の詩を詠った南北朝の臨濟宗の僧、中巖円月（二二〇〇―一三七五）、徳川家康に仕えた江戸の漢詩人、石川丈山（一五八三―一六七二）、江戸幕府の儒官となった柴野栗山（一七三六―一八〇七）、江戸時代の儒学者、亀田鵬斎（一七五二―一八二六）など。

第三章は、漢詩の中で女性の賛美や為政者への批判などを表現した室町時代の臨濟宗の僧、一休宗純（一三九四―一四八二）。

第四章は、徳川家康から家綱まで四代の将軍に仕えた江戸

時代の儒学者、林羅山（一五八三—一六五七）。

第五章は、江戸時代の儒学者と文献学者であった荻生徂徠（一六六六—一七二八）の、上野の花見などを紹介する「江戸の四季の音楽」連作等の季節と風景を詠む詩。

第六章は、江戸時代の画家と俳人で、漢詩と和詩を調和させた与謝蕪村（一七一六—一七八三）の送別詩の連作等が焦点となっている。

第七章は、江戸から明治にかけて流行した漢詩と俗語などを融合する、町人社会と共に発展してきた滑稽漢詩「狂詩」。

第八章は、江戸時代の曹洞宗の僧と歌人で、自分の心に忠実である詩を目指した良寛（一七五八—一八三二）。

第九章は、江戸時代の儒学者で歴史家、詩人でもあり、『日本楽府』などを刊行した頼山陽（一七八〇—一八三二）。

第十章は、江戸の儒学者で、名塾「咸宜園」を開いた広瀬淡窓（一七八二—一八五六）。塾生の志を励ます詩、旅の詩、酒の詩が紹介される。

第十一章は、政治家で軍人、いわゆる「維新の三傑」の一人であった西郷隆盛（一八二八—一八七七）。帝への忠誠や志の重要性などが詩の焦点。

第十二章は、日本近代史の文豪で、東西文学と詩文共に精通していた夏目漱石（一八六七—一九一六）。二松学舎での形

成期から晩年までの四期に分けての詩が取り上げられる。

最後の第十三章は、評論家と歴史家で、期待と希望を詩に託した徳富蘇峰（一八六三—一九五七）。

本書の「はじめに」にある様に、日本における漢詩での最も重要な関心事は、「社会がどうあるべきか、それを目指す中で個人はどうふるまうべきか」ということであり、一種の詩的証人（当時の現場証人として、物事を詩的に観察・記録する人物）である名人達の社会に対する考えや理念などが漢詩を通して見えて来る。

第一章を例に紹介すると、学者であり、官僚また文人であった菅原道真三〇歳頃の作品「雪中早衙」では、本人が官職に務め励む心構えが示される。また、「寒早十首 同用人身貧類四字」其九では、儒教的な詩風が表現される。

しかし、官僚の世界だけではなく、道真の私生活に関係する「生活詩」も紹介され、新年の祝いを描写する「旅亭歳日招客同飲」はその好例である。また、道真の人生には不運もあったが、官僚人生の途中に遭った左遷は、却って本人の漢詩の作意意欲を加速しながら、一層の肉体的な深みを与えることになった。妻への想いを表現する「読家書」と強い望郷の念を表す「謫居春雪」がその二つである。

本書の特徴の一つとして、日本の漢詩でありながらも、中国詩人の影響がある場合、それが指摘されている（『読家書』と杜甫の「春望」）。また、典故がある場合、その由来も示している（『謫居春雪』と「燕丹子」）。こうして日本漢詩の発展をもたらした中国詩との接点が明らかになる。

また、近代の例を見ると、道真から約千年後の明治を生きた夏目漱石が注目される。小説家あるいは英米文学者として有名であったが、青春時代に自ら付けた「漱石」という号が示す様に、漱石の最初の文学的関心事は漢詩であった。本書は漱石の作風の変遷に従って次の四期に詩作活動を分類する。

第一期（洋行以前）、第二期（修善寺大患の時期）、第三期（南画趣味の時期）、と第四期（『明暗』執筆時）。

第一期では、病気がちの漱石の心境を伝える「無題」詩が取り上げられるが、本書が指摘する「次韻」（他の人と同一の韻字を同一の順で使用して、詩を作成すること）が示唆する様に、この和韻の作品は漱石の魅力的な創作サロン生活も物語る。また、対照的に、前述の「無題」詩の疲れた気分を一瞬で払拭する様に、「菜花黄」詩では漱石の晴れ晴れとした心持が現れてくる。

第二期では、漱石の病と「剣」の劇的な例えのある無題詩

が中心となっており、漱石が抱えていた病気の苦しみを示す内容である、としている。

第三期では、「春日偶成十首 明治四十五年五月二十四日」其七と孟浩然の「春暁」との比較が興味深く取り上げられており、漱石のより写生的な表現法が見えてくる。

最後の第四期は、漱石が書いた小説『明暗』との関係が紹介されている。毎日午後に漢詩を作る時の心境は、毎朝の小説執筆時に描いていた世俗的なりアリズムを超越しようとしていた様に見受けられる。

この様に、本書は日本の漢詩を紹介しながら、歴史の流れの中の様々な偉人たちの人生の歩みにも光を当てる。よって、本書は、中国文学に興味を持っている読者だけではなく、国文学の学生、日本史や東洋史、比較文化の研究者にも興味を十分抱かせるであろう。明治一五〇年を機に、『知っておきたい日本の漢詩』は未来への知恵と示唆を存分に有している。日本人に限らず、是非知っておきたい内容である。

（がい・ほつぶす 日本漢詩文学学会員・

外資系金融機関勤務）